

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530676
 研究課題名（和文） 授業研究による現職教育の起源—群馬県玉村・芝根小学校の事例研究
 研究課題名（英文） The origin of in-service training through lesson study
 —The case study of Tamamura and Shibane elementary school
 研究代表者
 吉村 敏之（YOSHIMURA TOSHIYUKI）
 宮城教育大学・附属教育臨床研究センター・准教授
 研究者番号：80261642

研究成果の概要：

1930年代から1950年代にかけて、群馬県玉村小学校・芝根小学校・島小学校の教師たちが取り組んだ授業研究は、子どもの学力向上とともに教職の専門性の確立も進めた事実を示した。斎藤喜博を中心とした教師集団が行った授業研究は、今日の現職教育の指針となる。主な点は、次の3点である。(1)教育政策の転換や社会変動に流されず、自らの実践に根ざす教師の自律的な指導力形成の道を開いた。(2)教材の追求によって子どもの可能性を伸ばす、授業の思想と方法を生んだ。(2)教師が研究集団を組織する方法が、子どもの学習を高める方法の創造を促した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：教育方法学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：学習指導法、授業研究、教師教育、斎藤喜博、玉村小学校、『教育論叢』、『草原』、島小学校

1. 研究開始当初の背景

(1)教育方法史研究における意義

本研究では、戦前の教育改革期（「大正新教育」）における、教師による学習指導法の創造が、戦時下にも受け継がれた事実を示す。さらには、教師による学習指導法研究の持続が、戦後の教育改革期（戦後新教育）につな

がった事実、そして、その後の学校での授業研究につながった事実を明らかにする。

先行研究の多く（中野光『大正自由教育の研究』に代表される）は、戦前の「新教育」の試みが戦争によって「挫折」ないしは戦時体制に「吸収」されたという見方をしている。

しかし、1930年代～50年代にかけて、群馬県玉村小学校・芝根小学校の教師たち、斎藤喜博らの島小学校の教師集団が、一貫して授業研究を深化させた事例も、確かに存在する。

政策やイデオロギーと結びつけて教育実践の質を裁断する、従来の研究（海老原治善『現代日本教育実践史』など）に対して、本研究では、教師が教室で創り続けた学習指導の底流をなす原理と方法の連続性を示す。

(2) 教師教育への示唆

教師の専門性の根拠、教師の指導力形成のあり方が厳しく問われている今日、教師の学校における日常的な授業研究に基づく現職教育の重要性を示す。また、授業研究が教師の指導力の向上につながる条件を明らかにする。

玉村小学校・芝根小学校の事実から、教師の学校・地域における研究集団の質が指導力の形成にとって決定的であることがわかる。

本研究では、特に、学校において授業を創造する実践を積み重ねる中で、教師としての実践的指導力を身に付ける事実を示し、今後の教師の現職教育のあり方への示唆を得る。

2. 研究の目的

(1) 教師の創った「授業」の思想と方法に関する、教育史上の意義の解明

この研究により、日本の教師たちによる学習指導法研究の系譜をたどり、すぐれた実践を創った教師たちが交流し、学習指導を支える理論と方法を共有した事実を明らかにする。流行が現れては消える繰り返しの、政策や理論提唱者の主張とは違う、教師による学校・地域での授業研究の連続性が浮かび上がる。

教育政策史、教育運動史、教育理論史の図式に還元することなく、「授業」の固有の価値と「授業」創造による現職教育の意義を示す点に、本研究の独自性がある。とりわけ、戦後日本の教育改革がアメリカの民主的な教育

政策によって進められたとか、島小学校の授業創造は斎藤喜博という指導者の推進した「民主主義教育」であるといった、教育史研究の通説を吟味することに力を注ぐ。

戦前の学習指導法研究と戦後の授業研究が教師の実践レベルで連続性を持つ事実を、斎藤喜博と交流のあった、関根多嘉子氏と大澤素治氏からの聞き取りで確認した。敗戦後ただちに玉村小学校と芝根小学校の教師を中心とした教師の研究集団「西佐波教育会」が組織され、「授業研究会」が行なわれていた。また、機関誌『西佐波』を刊行し、授業実践のすぐれた教師に「西佐波教育賞」を与えるなど、教師の力量形成に大きく寄与した。この成果が島小学校の授業研究につながった。

玉村小学校から芝根小学校に至る「授業」の思想と方法が、日本の教育における貴重な財産であることを、教師の指導の緻密さと子どもの学習の深さの両面から、具体的に示す。

(2) 日本の教師たちの実績を踏まえた、授業研究を中核とした現職教育の創造

教師教育に対しては、学校における授業の創造を中心とした現職教育の有効性を示す。また、授業の創造をすすめることによる教師の実践的指導力の形成の可能性を示す。玉村小学校と芝根小学校の教師たちの努力は、政治や社会の混乱に左右されず、教室での「授業の創造」によって教師の専門性と自律性を確立する道を開いた。日本の教員文化の良質の部分であり、今日の現職教育の指針となる。

アメリカやイギリスのシステムを、教育学者や政策立案者がつまみ食いして作った「改革」モデル（例えば、佐藤学の「学びの共同体」論）は、日本の教育風土や教員文化になじまず、混乱を招き、教育の質を低下させる。教室で地道に授業を創り続けてきた、日本の教師の思想と方法に光を当てる必要がある。

3. 研究の方法

(1)1930-40年代（戦前・戦時下）の玉村小学校の教師たちの研究の実態を解明する。

①玉村小学校の学習指導法研究の特質を明らかにする。特に、教師たちの間で、どのような原理と方法が共有されたかを示す。

- ・当面、校内研究誌『草原』を手がかりにする。さらに、新たな資料の発掘に努める。
- ・奈良女子高等師範学校附属小学校の「学習法」研究との相違点を示す。
- ・玉村小学校の学習指導法研究に強い影響を与えた、「新教育」の原理と方法を示す。

②玉村小学校の教師たちの研究ネットワークの実態を明らかにする。

- ・地域の学校の教師、特に、研究に熱心であった教師（高崎中央小学校の岡田刀水士など）との交流の姿を解明する。
- ・全国の教師に広く読まれた教育雑誌『教育論叢』を通じた研究交流の実態（編集者の瀬川頼太郎、東京の滝野川小学校の本田正信など）を明らかにする。

(2)1940年代（戦時下）の芝根小学校の教師たちの研究の実態を明らかにする。

①玉村小学校の学習指導法研究を斎藤喜博が芝根小学校で発展させた事実を示す。

・新任期に斎藤から教師の基礎について指導を受けた、関根多嘉子氏に聞き取りを行なう。

②芝根小学校での文化活動（「矢川談話会」、「矢川文庫」、万葉集の輪読、美術教師の上野省策からの学習）の実態を明らかにする。

(3)1930年代～40年代の玉村小学校・芝根小学校の学習指導法研究の成果が、1952年から始まる、島小学校での斎藤喜博校長を中心とした「授業の創造」に活かされた事実を示す。

①芝根小学校の研究の実態を明らかにする。

- ・敗戦直後の1946年3月に公開授業研究会を

開催できた事情を解明する。

②玉村・芝根地域の教師たちの研究集団「西佐波教育会」「玉芝教育科学研究会」の活動の実態を明らかにする。

・教師たちがどんな問題にどのような方法で取り組み、どのような成果をあげたかについて、実態を明らかにする。

・全国レベルの教育研究活動（教育科学研究会など）と、玉村・芝根地域の教育研究がどのような関係にあったかを、明らかにする。

③島小学校の授業研究に、玉村小学校・芝根小学校における学習指導法研究の成果がどのように活かされているかを、明らかにする。

- ・子どもの学習形態と教師の指導過程
- ・授業研究の方法：授業記録、授業批評
- ・教師の研究組織のあり方

4. 研究成果

1930年代の玉村小学校、1940年代の芝根小学校の学習指導法研究で培われた思想と方法が、1950年代の島小学校教師集団による授業研究へと継承、発展した事実を明らかにした。3校とも、教育政策の変動に左右されず、教師たちは、専門性の根拠として、教室での学習指導法の創造に力を注いだ。3校の教師たちによる実践と研究の底流にある、共通の特徴は、以下の点である。

(1)政策や社会の動きに影響されず、教師の力が、教室での学習指導法の創造に注がれた。玉村小学校での研究は、世情が軍国主義に傾く中で、子どもの学力を伸ばす方法が追求された。芝根小学校での研究は、戦時の国民学校体制の中で続けられ、敗戦から半年足らずの1946年2月4日に公開研究会を開いた。島小学校での研究が進められた時期は、教員への勤務評定の実施や学習指導要領の法的基準性の強化など、国家による教育への統制策が次々に実施された。教師の創造性を阻む動きに対し、子どもの事実で抗した。

(2)教師たちは、教育界の流行に乗らず、日々かかわる学級の子どもの事実に拠りながら、学ぶ力を高める方法を、実際に創り続けた。教科学習の質を高める実践によって、子どもの可能性を引き出す方法を求めた。1930年代は「生活教育」、1940年代は「皇国民錬成」のスローガンがもてはやされ、教科指導が軽視されがちであった。そうした風潮にあっても、玉村小学校と芝根小学校では、斎藤喜博らが、すべての子どもに読み書き計算の基礎学力を養う指導法を実践し続けた。戦後は、生活経験を重視するアメリカ式の「新教育」が流行したかと思えば、やがて学力低下が騒がれて教科の系統性が強調された。無節操な動きの中でも、島小学校の教師集団は、人類の文化遺産を継承して新たな世界を開く「未来につながる学力」の形成に専念した。

(3)個人の問題を集団で共有して研究を進める、教師たちの方法と、個々の学習を組織して学級全体で教材を追求する、子どもたちの「授業」の方法は、類似性を持つ。玉村小学校でも島小学校でも、学習の遅れがちな子ども参加できる学習指導法の創造に、教師は力を注いだ。島小学校では、間違いを教材の本質に迫る問題へと教師が組織する授業が創られた。個々の教師が直面する指導法の課題を学校の教師集団全体で共有し、改善策をさぐる授業研究の方法が、授業に活かされた。

授業における子どもの学習の様子を記録する、授業の批評では子どもの新たな事実を発見するなど、子どもの学ぶ姿に注目した研究が、玉村小学校から島小学校に至るまで蓄積されてきた。島小学校の実践の記録類の源流は、玉村小学校の研究誌『草原』にある。

以上、本研究では、1930年代～50年代の群馬県玉村・芝根・島小学校で、授業の創造によって教師が指導力を高めた事実を示した。現職教育の確かな指針となる、財産である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1)吉村敏之「『未来につながる学力』の追求—群馬県島小学校における『授業の創造』」『宮城教育大学紀要』(査読無)43巻、2009年、231—244頁

(2)本間明信「何のために授業を研究するのか(授業研究の目的)」『宮城教育大学紀要』(査読無)43巻、2009年、223—230頁

(3)吉村敏之「雑誌『教育論叢』における事例研究—学級の実事から理論を創る」『宮城教育大学紀要』(査読無)42巻、2008年、217—227頁

[学会発表] (計4件)

(1)吉村敏之「岡田刀水士の学習指導法—子どもの生活を見る」、日本教育学会第67回大会、2008年8月30日、佛教大学

(2)本間明信「島小学校授業記録の異同一『典型』ということ」、日本教育学会第67回大会、2008年8月30日、佛教大学

(3)吉村敏之「学習指導における—子どもの発見」、日本教育学会第66回大会、2007年8月30日、慶應義塾大学

(4)本間明信「『見る』『見える』の教授学—日本の授業研究の伝統」、日本教育学会第66回大会、2007年8月30日、慶應義塾大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉村 敏之 (YOSHIMURA TOSHIYUKI)
宮城教育大学・附属教育臨床研究センター
准教授

研究者番号：80261642

(2)研究分担者

本間 明信 (HONMA AKINOBU)
宮城教育大学・附属教育臨床研究センター
教授

研究者番号：70106748

(3)連携研究者

なし